農林水産大臣賞

上ノ村環境保全プロジェクト　(三重県津市)

『「人」と「農」を核に村をデザイン』

受賞者のことば

上ノ村環境保全プロジェクト　会長　　大倉 信幸

このたびは栄えある賞をちょうだいし、感謝と喜びの気持ちでいっぱいです。これもひとえに皆様方のご指導のおかげだと、心より厚く御礼申し上げます。

上ノ村の農地・水・環境保全向上対策は平成21年に、女性の代表と自治会との密接な連携を軸に活動を開始しました。

今回、地元での審査にご参加いただいた方は、既に感じて頂いているところかと思いますが、「多様な主体による多彩な活動」は、地域に多くのリーダーを生み出しています。上ノ村の「村づくり」の目標は、「人づくり」です。パワポを使わないプレゼンを通して訴えたかったのは正にそのことであり、それぞれの個性や人間性が上ノ村という集落の魅力をつくっていることです。

今回のプレゼンを通して、お互いが、どんな思いで活動していたかを改めて理解しあったことは、「好きなこと、得意なことで地域に貢献して、喜んでもらえる喜びを」という「幸福（しあわせ）のサイクル運動」とあいまって、次のステップの原動力になると思います。

住民としての権利主張や苦情、要望に終止する活動は、自己主張と勘違いされがちですが、「依存」の変形にほかなりません。地域おこしの基本である「主体性」の否定を意味します。集落のことは自分たちで主導して「成長」を目指す以外に、実現の道はありません。その過程で県や市の力をお借りする、助けてもらうことは多いのですが、あくまでも我が事としての取組がポイントです。地域（組織）と行政が相互に依存しあって、相乗効果を生み出して行くことこそが地域の「成長」の基盤だと考えています。そういう意味で、三重県、津市はもとより東海農政局さんまで巻き込んで「日本一」に挑戦したことは、集落、組織の成長のための大きな肥やしになったと思います。

上ノ村という集落にかかわるすべての人や組織が、「成長する機会」と「元気」を得られるような活動を継続していくことをお約束して、受賞の喜びとお礼の言葉とさせて頂きます。どうもありがとうございました。

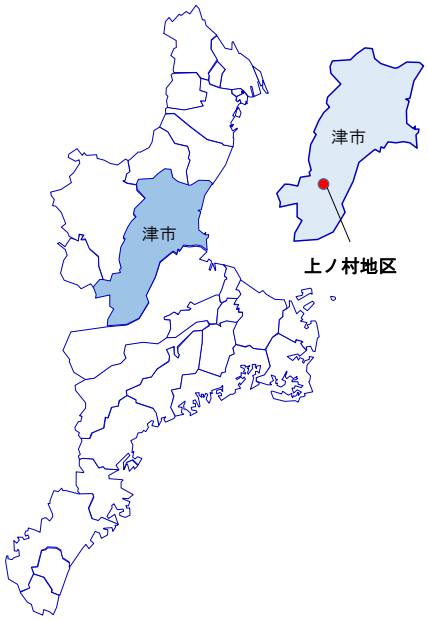
1　むらづくりの内容及び成果

（1）地域の沿革と概要

津市は三重県のほぼ中央に位置しており、総人口は279,886人（平成27年国勢調査）、総面積は711.1㎢で県内最大である。耕地面積の約78％が水田で、コシヒカリを中心とした良質米が生産される。小麦、大豆の栽培も増えており、キャベツ、ブロッコリー、梨等の生産も盛んである。

上ノ村地区は津市西部の中山間地域に位置し、人口280人、世帯数78戸、農地面積41ha（田39ha）の小さな集落で、稲作が中心で、農家数は53戸、専業農家は地区の担い手１戸のみで、他は兼業農家である。営農組合はなく、多くの農家が担い手に田植え、稲刈りを委託している。

上ノ村の位置



（2）むらづくりの動機、背景

上ノ村地区は、農業者の高齢化等により、農道・用排水路等の管理が困難になっていることに加え、獣害により農作物被害が増加したことで、農業離れによる遊休農地の増加などが課題となっていた。

こうした中、「地域を何とかしたい」という思いを持った自治会の有志が平成17年に地域の盆踊りを40年ぶりに復活させた。この取組が集落の将来像について話し合うきっかけとなり、田んぼを守り、地区の住民全員での地域づくりを目指し、「農地・水・環境保全向上対策事業」に取り組むこととし、平成21年6月に当該事業の活動組織として「上ノ村環境保全プロジェクト」（通称「ＫＫＰ」）を設立した。

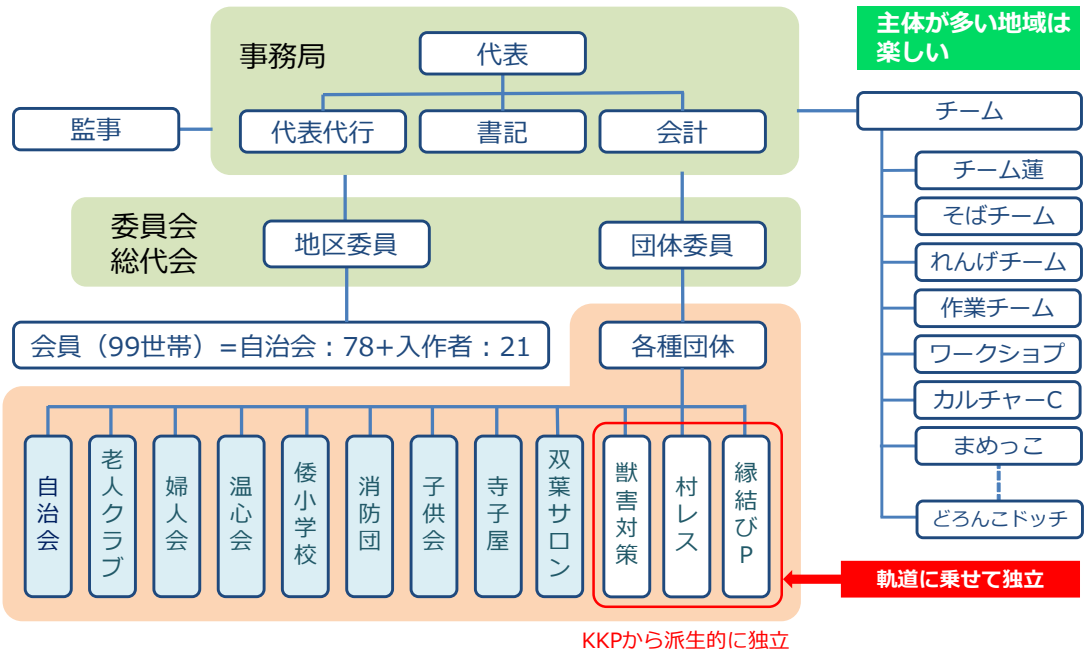
（3）むらづくりの推進体制

ア　ＫＫＰの組織体制、構成員の状況

ＫＫＰは、上ノ村地区の78世帯の全住民及び地区の農地への入り作者21世帯、合わせて99世帯で構成されている。代表以下４名で構成する事務局と、地区委員７名で構成する委員会により運営している。

毎月開催される事務局会議及び偶数月に開催される委員会でＫＫＰの活動を協議し、地区委員から地区の各戸に情報共有を行い、地域が一体となった活動につなげている。

ＫＫＰの組織体制



イ　取組の合意形成

ＫＫＰは、地域を自分たちで守るという住民の主体的な参加を促すため、地区で取組方針を決めるときは、一部の役員が決定するのではなく、常にていねいな合意形成を意識して活動している。

①　女性会長の気配りの効いた細やかな合意形成

ＫＫＰは設立にあたり、女性が動くことで地域が活性化するという思いから、初代会長に女性を迎え、合意形成の過程で、集落で発言することの少なかった女性からの意見を聞き取って反映することで、女性を中心とした活動が広がり大きな推進力となっている。

②　ていねいな合意形成で参加しやすい組織へ

侵入防止柵のルート決定や設置作業においては、地区委員の集まる総代会で意見を聞くだけでなく、ＫＫＰが全戸に資料・Ｑ＆Ａを配付して２度の説明会を開催した。説明会に出席できない女性や独居老人世帯へも戸別訪問等により直接意見を聞くなど、全戸、全員に納得してもらうようにていねいな合意形成に努めたことで、柵の設置、柵の管理・運営についても住民挙げて行うようになった。

この取組がＫＫＰの信頼を高め、以降の活動についても皆の理解を得やすくなり、活動を広げることができた。

ウ　ＫＫＰから独立した活動組織

ＫＫＰでは、立ち上げ当初より「主体が多い地域は楽しい」という思いから、事業ごとに活動チームを作り、活動の進捗に応じて独立させている。

①　上ノ村自治会獣害対策協議会

侵入防止柵の管理作業

上ノ村自治会獣害対策協議会（以下、「獣害対策協議会」という。）は、集落最大の課題となっていた獣害対策を担う組織として、平成23年に設立し、侵入防止柵の点検・補修作業と有害獣類の捕獲を行っている。

当協議会では、柵の全支柱に番号を付し、柵データベースを作成し状況把握することで、点検・管理作業を確実かつ効率的に行っている。年３回行う柵の点検作業には、一人暮らしの高齢者世帯が多い中にあっても、全住民の７割を超える参加があり、この活動は地区の重要な取組として根付いている。

当協議会は害獣の捕獲技術に優れた者を有しており、近隣地区の害獣捕獲にも貢献している。

②　上ノ村縁結びプロジェクト

学生田の稲刈り作業

上ノ村縁結びプロジェクトは、平成26年に地域での活動を希望する三重大学の学生10人程度で始まった。現在では35人程度が活動しており、米作りやレンコン、クワイの栽培による休耕田の復活、廃品となった農業機械の再生利用、手作りの集落地図による情報発信、集会所にピザ窯を作り地区住民と交流するなど広範囲に取り組んでいる。

活動当初は住民との関わりが薄かったが、ＫＫＰが住民に呼びかけをしたことで、米づくりや収穫祭など学生達の活動に参加・協力する住民が増えている。

獣害対策にも熱心で、学生３人がワナ免許を取得して大学に獣害対策サークル「トラッパーズ」を結成し、緩衝帯の設置や害獣の捕獲活動に参加している。うち１名が地区の空き家を修繕して定住し、後継者として期待されている。

③　村のレストラン

ＫＫＰの「好きなこと、得意なことで地域に貢献する喜びを」という呼びかけ

に応えた、料理の得意な女性２人（60歳代、70歳代）が、平成26年4月より地区の集会場で「村のレストラン」の取組を開始した。

村のレストランでの交流

月に１回の開催日には、地区の内外から30～40人の利用があり、地域でとれた米や野菜、ジビエなどを活用したメニューが好評であり、食事の後も会話を楽しめ、世代を越えた交流の場となっている。またＫＫＰの各活動の後にも、村のレストランを開催し地域交流の拠点として活動をサポートしている。

地域でとれた食材を使うことで、高齢者が自分で栽培した農産物を食べてもらう喜びを感じ、作付意欲が向上し、農地の有効活用、休耕田の解消などの成果が表れている。

３回目の開催からは、お菓子作りが得意な女性２人がパティシエとして参加するなど活動は広がりを見せている。

ＫＫＰでは、地区内の空き家を活用して、常設レストランの開店を予定している。

今後の高齢化を見据え、地区の高齢者を助ける活動として、宅配弁当の販売も検討している。

エ　女性が活躍する組織

ＫＫＰは、女性が初代代表を務めた組織でもあり、地域づくりに女性が活躍できるよう積極的に支援している。特に子育て中の母親世代の取組は、当初より近隣地域の者も受け入れて活動しており、上ノ村だけでなく周辺の集落を含めた地域全体の活性化に寄与すると期待している。

①　上ノ村ワークショップ

ワークショップの様子

上ノ村ワークショップは、平成28年に子育て中の母親世代と縁結びプロジェクトの大学生との連携で始まり、地域の課題を一緒に考え、活動を企画し取り組んでいる。平成28年には、ワークショップで出たアイデアが自治会と池の管理団体を動かし、約10年ぶりに惣谷池の池干しイベントが復活した。

②　まめっこ

まめっこは、ＫＫＰが開催する地区の交流活動で、「食」と「農」への関心が高い、小学生の子どもを持つ母親達11世帯（地区外４世帯）37人で結成し、平成

27年より休耕田約7ａを活用して、栽培が容易で加工も楽しめる大豆の栽培を始めた。大豆の生長を見守る中で、通学途中に草を取る子どもがいるなど、大豆を通して様々な学びが生まれた。収穫した大豆は、大学生と一緒に味噌や豆腐等に加工した。

まめっこの活動

まめっこの取組で、農業や地元農産物への関心の高まりや、子供たちの自発的な取組が起こったことが大きな成果で、今年は子供たちの提案でサツマイモにもチャレンジしている。

また、本取組は、母親と子どもの活動として始まったが、耕起作業などに父親を巻き込んで活動したことで、父親達による「電気工作教室」が開催されるなど親子活動へ広がりを見せている。

オ　連携する組織

上ノ村の地域づくりの活動は、様々な活動を通じて受入体制が整っていることから、大学や企業から注目されており、ＫＫＰと連携した活動への参画が増えている。

①　三重大学

三重大学の地域戦略センターとは、平成25年に「三重県の地域活性化プラン事業」を通じて連携をスタートした。学生達が縁結びプロジェクト活動の中心として活躍している。

生物資源学部とは、獣害対策に関する研究（ドローンを使った害獣の追い払い、侵入防止対策）で協力関係にあり、地元猟師の経験や知恵を盛り込んだ獣害防止システムを研究し、上ノ村で実証試験を実施している。

②　大和ハウス工業（株）三重支店

大和ハウス工業は、ＣＳＲ活動で、平成27年から約27aの休耕田を活用し米作りをしている。また、遊休農地の草刈りやヤギの囲い作りなど地域の活動にも参加し、秋には収穫祭を開催し住民との交流を行っている。

大和ハウス工業田植え

③　九鬼産業（株）

九鬼産業(株)は、国産ゴマの生産の拡大と遊休農地の解消を目指し、ＫＫＰと連携して、平成28年度から約８ａの休耕田を活用してゴマの栽培を開始した。平成29年度からは、はくさん作業所（Ｂ型福祉事業所）との農福連携にも取り組んでいる。

（４）むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

ア　農業生産面の取組

ＫＫＰでは、中山間地域の実情を踏まえ、規模拡大等による収益向上だけでなく、様々な取組を組み合わせ「身の丈にあった活動」により、田んぼを田んぼとして守り地区の継続的な農業生産を可能としている。

①　獣害防止による生産基盤の確立

ＫＫＰでは、集落の問題を探るため、平成22年に「集落の課題に関するアンケート」を全戸に実施し、集落の最も大きな問題が獣害であることがわかり、その後ＫＫＰの活動の基礎となる、獣害対策に取り組むこととなった。

平成23年に、獣害対策協議会を設立し、全住民参加により８kmの侵入防止柵を設置し、柵の適正な維持管理や年間200頭を超えるシカ、イノシシなどの害獣の捕獲に取り組んだことで、農作物の被害金額は８割減少し（平成22年の450万円から平成27年は95万円に減少）安心して農業生産に取り組める基盤を確立した。

②　新たな担い手の就農と農地の集積

ＫＫＰの活動で獣害が軽減されたことで、担い手への農地集積が検討されたが、地区内の担い手は70歳代で、耕作面積の拡大には限界があった。

しかし、担い手の40歳代の後継者が、勤め先を退職し農業大学校で学んだ後、平成25年より父親と共に自営農業に従事することとなり、耕作面積は平成25年の７haから平成29年には15haに倍増した。

担い手親子

就農した後継者は、当初就農を考えていなかったが、ＫＫＰの活動に参加する中で「自分にできる役割が何かあるのではないか」と考え就農を決断した。

ＫＫＰの取組による、獣害防止と、用排水路等の維持管理や草刈り等の負担軽減が、新たな就農と農地集積につながった（農地集積率：17.7％ → 36.6％）。

③　遊休農地を解消して農地を守る取組

上ノ村では、耕作の再開、企業や学生の活動など様々な取組により、遊休農地を解消して地区の農地を守る取組を行っている。ＫＫＰの取組により、農家の耕作再開67a、学生の活動23a、企業連携35a、まめっこ７a、蓮池２aなど、遊休農地の解消が進んでいる。

イ　生産・流通面の取組

ＫＫＰの活動が、担い手への農地集積につながり、生産性が向上し収量も安定したことが、担い手の経営向上につながっている。

上ノ村地区は良質米「一志米」の産地で、中でも特に食味の良い米が生産される地域として知られ、大阪の料亭など県外にファンもおり、ほとんどが個人向けに出荷されている。獣害が減少したことで生産量が増加し農家所得が向上している。

また、小規模の農地についても、獣害の減少で米や野菜の生産が回復しており、地区の農産物を村のレストランで利用することにより、高齢者が自ら栽培した農産物を食べてもらうことに喜びを感じ、生産意欲が高まっており、農地の有効活用、遊休農地の解消などの成果が表れている。

ＫＫＰでは、村のレストランの店舗化、常設化に併せて、農産物の販売拠点を兼ねることを計画しており、農家所得の向上も期待されている。

（５）むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

ア　農村環境保全の取組

①　地域の環境美化の取組

ＫＫＰでは、結成当初より地区の環境保全活動に取り組んでおり、全住民が参加して、地区内の水路等の補修作業や施設の共同点検作業などの生活環境保全活動を行っており、美しい農村環境及び営農環境が維持されている。

蓮池

②　農村景観の形成の取組

ＫＫＰでは、平成21年に湿田のため遊休農地となっていた水田２aにハスを作付けし蓮池として整備した。花の時期には近隣の人々が見学に集まり賑わう場所となっており、地区住民はもとより、近隣地区の住民の憩いの場となっている。

ＫＫＰでは、害獣の侵入防止のために３頭のヤギを飼育している。獣害対策が目的だが、ヤギがいる農村風景が人気となり、ヤギを見るために訪れる人が増えている。今年２頭の小ヤギが生まれ地区のアイドルとなっており、獣害対策に加え景観形成・住民交流にも役立っている。

ヤギとこどもたち

イ　コミュニティ活動の強化、交流等の取組

①　集会所の機能強化

ＫＫＰでは、今後の多様な活動に対応できるよう、平成25年に「コミュニティ助成事業」（自治総合センター宝くじ社会貢献広報事業）を活用して、活動拠点の集会所へ、活動に必要な備品（情報誌印刷用のカラーコピー機、村のレストラン用の大型電子レンジ、イベント用の音響装置等）を整備したことで、集会所の利用回数が大きく増加しており、コミュニティ活動が活発化した。

②　手作りのピザ釜

縁結びプロジェクトの学生達が、地域貢献の活動として集会場に手作りでピザ釜を作成した。地域に関わる者は誰でも使用でき、地域活動の慰労会、学生や企業との交流等に活用され、地域活動、交流活動に欠かせないアイテムとなっている。

また、学生達のアイデアで生まれたジビエを使用した「上ノ村ピザ」は、おもてなしの代表的な料理の１つとなっている。

手作りのピザ釜

③　盆踊り（まつり）の復活とエイサー

上ノ村成願寺盆踊りは、特別な伝統行事がない上ノ村の子ども達が大きくなって、郷里を思い起こせる行事を作りたいとの想いで、平成17年に復活した。同時に、祭りを盛り上げる新たなイベントとして、人材育成の仕組みに感銘を受けて沖縄の伝統芸能「エイサー」を取り入れ、「エイサーはくさん倭人（やまとんちゅ）」を結成した。

平成24年に子供たちのエイサー隊を結成し、周辺地域を含め倭（やまと）小学校区で活動しており、津市の祭りに参加するなど活動が広がっている。

ウ　地区の魅力発信の取組

①　上ノ村環境保全通信の発行

ＫＫＰでは、毎月末にＫＫＰの活動やイベントを紹介する「上ノ村環境保全通信」（113部）を発行し、地区の全戸に配布しＫＫＰの活動を紹介して、地域ぐるみの活動につなげている。

②　上ノ村紀行の作成

縁結びプロジェクトの学生が作成した「上ノ村紀行」は、地区の地域資源等を記載した地図で、地区全戸への配布のほか、近隣の駅、行政機関等

集落地図「上ノ村紀行」

へ配布し交流に寄与している。地区の住民にも評判が良く、地域資源や地域の魅力を再発見するきっかけとなっている。

2　むらづくりの特色及び所見

上ノ村は小さな集落で、全国の多くの集落がそうであるように、特産物、伝統文化、観光スポットなどの目立った地域資源は少なく、少子高齢化や獣害など中山間特有の課題を抱えていた。

上ノ村の重要資源は、良質な農産物を生産できる整備された農地と、村を支える人である。

地域を振興する際、特産品のブランド化、観光、６次産業化といった経済性を求める取組が注目される中で、上ノ村では、村を支えるのは人であるという観点から、経済性にとらわれない地域の風土や人間性に配慮した、無理のない身の丈に合った取組を基礎として、外部から学生や企業を巻き込み、短期間に数々の取組を立ち上げ継続させている。また、活動を進める中で、担い手の規模拡大、村のレストランでの地産地消など、地区農家の所得向上の道も開けてきている。

活動の中核であるＫＫＰは、初代に女性の会長を迎え、ていねいできめ細かな合意形成を行う中で、集落で発言の機会の少ない女性の意見を取り入れて、女性の活躍を促し、地区の活性化につなげている。

ＫＫＰは、「人と農を核に村をデザインする」をコンセプトに、活動のきっかけ作り、場づくりを推進している。参加者の気持ちに沿って、「できること、やりたいこと、得意なこと、好きなこと」から自由に活動を立ち上げ「この指とまれ！」式に呼びかけ、参加者が地域に貢献できる喜びを体験することで、さらなる活動につなげていく（「幸福のサイクルを回そう！」運動）。この取組が、集落の次世代を担う若い母親世代と子供たちの参画という継続的な活動につながっている。

上ノ村の取組は、経済的な成果を指標としなくとも、地域に関わる人達に「主体的な取組」を行う活動主体が多いことこそが、持続性のある地域社会を実現できる事を示した。上ノ村の取組は今後の新たなむらづくりの一つの形として、むらづくりの模範となるものと考える。

上ノ村はまだ完成しない、新たな取組が次々企画されており、周辺地域へも。広がりを見せている。